文献調査に関連して

坂 本 正 誠（原研）

私もシグマ委員会には発足した当時から専門委員として熱化グループと関係あつたように思う。思うとしかいえないのはそれだけ不熱心であつて，記憶があいまいなことを示している。何年かたつて，何をきつかけとしてか，これもあいまいであるが，少しは何かの形で役に立ちたいと思い，当時収集作業は進められていたが，整理や活用がされていなかつた熱化グループの文献整理を受け持つこととし，今日もなおそれを続けている。

文献調査というのは何かの作業なり，研究なりをはじめようとした時，必ず通る過程であり，出発点となる仕事である。したがつてその必要性は誰しもが認めるところであろう。しかし一方ではそれを組織的に行う場合その性質そのものの中に落し穴を含んでいる。出発点である以上，ゴールに一番遠いところにいることも明解な事である。それだけに地味であり，成果だけを性急に求める人々の評価からは遠い存在である。又何かの作業を始める場合には必ず通らなければならないだけに，必要にせまられれば個人的にでも行わざるを得ない側面もあり，自分に興味の少い範囲まで義務的に調べ，その上一定の形式の中に書き込まねばならないことに抵抗を感じる場合もあるであろう。このようなことが，収集作業の規模が大きくなり，作業量が増すにつれて，作業自身を進めるにあたつての目的に昏迷を生ずるもとになつているようである。中性子に関して国際的なCINDAシステムがある現在，後から出発する活動を維持することはそれだけ困難が多い。

高速中性子関係の文献調査が相当の規模にまで発展し，それを索引するＧＩＡＮＴというコードも完成したところで休止状態になつてしまつたのも，上に述べたようなことが関連していると思う。この調査活動は，いろいろの作業分野での仕事は進んでいたにもかかわらず，全体のまとめに失敗したものである。それは全体としての最終目的を認識した上で，作業全体を把握した人がいなかつたことを示している。シグマ委員会の議論の中でも，進んで担当する人がいない以上作業は休止せざるをえないという，事実を認めるだけで，本来の目的を達成するため，そのような条件の中でどうすればよいかという対策が何ら討議されずに過ぎているように見えるのは，何か不思議な話である。この件に関しては私にも責任のないことではないが，近い将来核データ．センターの設立と，その機能の拡大，充実を目指していることを考えると，それはあまりにも淡白過ぎる感じがするのである。

熱化グループの方の文献調査の活動は，高速中性子グループより遅れていたようであり，それだけに未だ続けられ，最近ようやく計算機により整理する体制ができたばかりである。その結果は文献集第３版として間もなく出版される。このグループでも問題がないわけではなく，専門委員の方

方がだんだん年をとつてきて，いろいろ世の中のことで忙しくなつてきたせいか，あるいは人減らし合理化のせいか，分担していたゞいている原論文を読んでデータ・シートに書き込む作業が停滞しがちである。その上予算不足によるグループ会合の回数の減少はそれを助長しているようである。そんな状況もあるが，第3版は前に出した版に比べてずつと充実したものになりそうである。ここでもう一度気をとりなおして，今後は収録すべき文献範囲の再検討，調査範囲の拡大，ＣＩＮＤＡの熱中性子関係の文献とのつき合せなどを行つて，もつと充実した内容のものとして行くべきであろう。

文献集の内容が充実してくると，その出版をＪＡＥＲＩ－Ｒｅｐｏｒｔの形ではなく，もつとシグマ委員会の出版物であることを前面におし出せる形の出版物としたいものである。その際は表紙のデザインなどもそれ自身評価されてもよいようなものにもできるだろう。核データ・センターの実現を目指し，その上でその機能のダイナミックな拡大と充実を意図するとき，委員会としての業績のまとまりを誇示する出版の形があつてよいように思う。